動詞重複の機能
―日本語と他言語の動詞畳語比較―

清　海　節　子

１．はじめに

本論では，動詞の重複形である畳語について，様々な言語からのデータを調査し，その傾向を確認した上で，日本語の動詞畳語の機能を考える。検討するのは，語レベルの繰り返しであり，語基すべて，または部分的に繰り返される形態論的プロセスを「重複」または「畳語」と呼ぶことにする。このプロセスは，日本語を含め，世界の多くの言語で観察されている。さらに，名詞，形容詞，副詞，動詞という主要な品詞がすべて重複することも認められている。本論では，動詞の畳語に限定し，その機能について考察する。具体的には，語基の意味が重複によって変化が起きる場合だけでなく，別の品詞に変わる「カテゴリー変換」を主に扱うことにする。

日本語の例を考えてみよう。「歩き歩き考えた」と言うと，「歩く」動作の継続または反復が表現されている。また「生き生き」は，「生きる」の畳語であるが，「① 新鮮で生気があふれているさま：「―した目」「―（と）描写する」② 元気で，活気のあるさま：「―（と）した表情」（『スーパー大辞林』）を表す副詞であり，動詞から副詞へとカテゴリーが変換されたと考えられる。一方で，動詞が語レベル以上で繰り返されることがある。例えば，次のような動詞の反復である：A「ケーキ食べた？」B「食べた食べた」，または，待ち合わせをして，遅れて来た人が目に入った時，「○○さんが来た来た」と言う場合である。これらは，文レベルの繰り返しであり，動詞が反復されて，その意味が強調されたと考えられる。本論では，このような反復の用例は考慮に入れない。

以下の構成は次の通りである。2 節では，重複（畳語）についての定義を提案する。3 節では，日本語以外のさまざまな言語における動詞畳語に関して，先行研究を参考にして用例を挙げ，形態と意味の傾向を検討する。4 節では，日本語の動詞重複について，先行研究を取り上げ，歴史的な考察を含めた特性を概観する。5 節は，他言語における動詞重複のデータ調査の結果と比較して，日本語の動詞重複の特徴を考察する。最後の 6 節では結論が述べられる。

２．重複（畳語）の定義

本節では，重複（畳語）の定義を提案するが，その前に，2.1 では，英語の ‘reduplication’ について『言語学大辞典〈第 6 巻〉術語編』を参考に，用例を確認する。また，2.2 では Kiyomi (1995) に従って，畳語の定義と型について簡潔に論じる。

2.1『言語学大辞典〈第 6 巻〉術語編』

『言語学大辞典〈第 6 巻〉術語編』は，‘reduplication’ を「畳音」と訳している。しかし「重複」とも呼ばれると断っている。本来は，音の反復を意味するが，文法的には，全部または一部を反復することで語形変化あるいは派生を生じる形態的プロセスであると説明している。典型的な例として，古代ギリシャ語やサンスクリットなど古相の印欧語の動詞の完了を表す形態であると考えている。以下のように，ギリシャ語は，語幹の頭子音（下線部）を語頭に反復させて完了を示す。

(1)　δέδορκα「私は見た」
　　βέβηκα「私は行った」

これに関して，Matthews (1991:134) は，古代ギリシャ語の完了のプロセスを次の型で表されるだろうと提案している。X は語基であり，C^1 と C^2 は，理論的には同一のものである。

⑵　$C^1X \rightarrow C^2e\ C^1X$

矢印右の型から，部分的な畳語であり，接頭辞として最初の子音のみが繰り返され，/e/ という母音が必ず生じることが分かる。

『言語学大辞典〈第６巻〉術語編』によると，動詞によっては，現在を表す場合もある。さらに，サンスクリットは，完了だけではなく，願望法にも重複がみられる。このような印欧語の畳音は元来，語幹の意味を強調していたらしい。ところで，上のような現象は，印欧語以外では，フィリピンのタガログ語に見られ，重複される動詞が「未然相」（現在や未来を表す）だけでなく，「継続相」も表現する。語幹の第一音節を反復させる：naglalaba「洗って（いた）」，即ち，行為の継続・未完了のアスペクトを表現していると説明されている。さらに，長屋（2015）によると，タガログ語の動詞 ‘gawin’「する」は，第一音節の子音と母音が反復されると，‘ga-gawin’「するだろう」のように未来を表す。一方，タガログ語と同じオーストロネシア語族に属するマンガップ語（Mangap-Mbula）は，語基の後ろの部分が反復されると継続を表す（ ‘kuk’「吠える」‘kuk-uk’「吠えている」）。

『言語学大辞典〈第６巻〉術語編』の説明の最後の部分で，「人々」「山々」という名詞畳語の例を挙げて，語自体の反復に文法的価値を与え複数を示す「畳語」もあると述べている。以上から，この辞典では，動詞と名詞の畳語を区別して扱っていることが分かる。動詞の例では，重複により，テンスとアスペクトにかんして意味の変化があると理解できるであろう。

2.2 定義と型

畳語の定義として，Kiyomi (1995:1145) の提案に従い，以下を採用する。

⑶　X という音韻的形式の単語を仮定すると，畳語は XX または xX である。
（x は，X の一部であり，x が X のすぐ前か後ろ，または X の内部に現れる）
条件：(i) XX または xX は，意味的に X に関係していなければならない。
(ii) XX または xX は，生産的でなければならない。

上の条件から明らかではあるが、擬音語・擬態語のように，語基の繰り返しでない場合は考慮に入れない。また語彙化された語（語基の意味と重複された語との間に意味の関連性が認められない場合），あるいは，語基の意味と重複された語との間に意味的関連性があっても生産的な重複プロセスが見られない場合は畳語とは考えない。一方で，語の重複で品詞が変わる場合，また文法的性質に変化が起きる場合は，語基と重複語が意味的に関連しているので考慮に入れる。このような変化は一般的な畳語とは区別して，「カテゴリーが変換された畳語」として捉えることにする。

また，畳語と言っても，語全体が反復されるだけでなく，語の一部が反復されることもある。一部分の反復は，接頭辞，接中辞，または，接尾辞とみなされる。以下に動詞の例を挙げる（Kiyomi 1993）。

⑷(i) 接頭辞
ralir「歩く」 ra-ralir「あちこち歩き回る」
（アンブリム語：マライ・ポロネシア）
(ii) 接中辞
ta-’ aki「持ち上げる（単数）」
ta-a-’ aki「持ち上げる（複数）」
（レンネル語：マライ・ポロネシア）
(iii) 接尾辞
nilalgu「殺す」 nilalgu -gu「たびたび殺す」
（マウング語：オーストラリア）

以下のように，音変化を伴うこともある。

⑸(i) wida「見る」widu-wida「誰かを見つけ出す」
（バガンジ語：オーストラリア）
(ii) peeleeg「隠れる」pel-peeleeg「何度も隠れる」
（ヤップ語：マライ・ポロネシア）

３．日本語以外の動詞重複

この節では，先行研究から得られた日本語以外の動詞畳語の用例を見ることで，意味と型の特徴と傾向を確認する。3.1 では，Sapir (1921) から動詞畳語の例を取り上げる。3.2 では，5 つの語族に属する 89 言語を調査した Kiyomi(1993) を参考に，動詞畳語の例を検討する。3.3 で，要点をまとめる。

3.1　先行研究 (Sapir 1921)

最初に，Sapir (1921) が挙げている様々な言語の重複された語のデータから，動詞の例だけを取り上げる。最初に，語全体が重複されている動詞の例を挙げ，次に語の一部分が重複されている例を見ることにする。以下カッコ内には，言語名と話される場所，属する諸語，語族などを記した。[1)]

⑹　語全体の重複

(i)　go「見る」 go-go「まじまじと見る」
（ホッテントット語：［アフリカ南西部］コイサン諸語）

(ii)　gam「語る」 gam-gam「語らせる［使役］」
（ホッテントット語）

(iii)　fen「かじる」fen-fen「あらゆる側からかじる」（ソマリ語：クシ諸語）

(iv)　iwi「見える」iwi iwi「注意深く見回す / 調べる」
（チヌーク語：［北米先住民族インディアンの言語］ペヌティ語族）

(v)　yi「行く」yiyi「行く，行く行為［不定詞］」
（エウェ語：［西アフリカ］ニジェール＝コンゴ派のクワ諸語）

(vi)　wo「する」wowo「なされた［動詞状形容詞］」
（エウェ語）

⑺　語の一部分の重複

(i)　gen「眠る」ggen「眠っている」
（シル語：モロッコのベルベル語派）

(ii)　kamu-ek「私は急ぐ」
kakamu-ek「私はもっと急ぐ」
（ボントク・イゴロト語：［ルソン島北部で話される］フィリピン語群）

(iii)　gyibayuk「飛ぶ」
gyigyibayuk「飛んでいるもの」
（ナス語：［ブリティッシュコロンビアのインディアンの言語］ツィムシアン語族）

(iv)　himi-d-「話しかける」himim-d-「よく話しかける」（タケルマ語：［アメリカオレゴン州インディアンの言語］ペヌティ語族）

古いインドヨーロッパ諸語は，語幹要素が重複されると，動詞の完了形を表す。以下の例では，語幹の最初の子音が語頭で繰り返されている (Sapir 1921: 82)。

⑻　サンスクリット語：dadarsha（私は見た）
ギリシャ語：leloipa（私は残した）
ラテン語：tetigi（私は触れた）
ゴート語：lelot（私はさせた）

重複がテンスを表す例を見てみよう。北米インディアンの言語の一つであるタケルマ語の動詞には次の二通りの形式がある：① 現在・過去を表す形式　②未来及びある叙法と動詞派生語の形式。次の例から，‘eb’ の重複は［現在 / 過去］というテンスを示すことが分かる。一方，重複がないと未来を表す動詞になる。

⑼　タケルマ語：al-yebeb-i’n
（私は彼に見せる / 見せた）
al-yeb-in（私は彼に見せるだろう）

3.2　Kiyomi (1993)

Kiyomi(1993) が調査した言語のデータから，動詞に限定した結果をまとめる。[2)] 世界の言語の畳語におけるさまざまな意味などを確認することが目的である。Kiyomi (1993) は，次の 5 つの語族に属する 89 言語をデータとして畳語の調査を行った（括弧内の数字は調査した言語数である）：バンツー語族 [18]；オーストラリア語族 [20]；パプア語族 [14]；オーストロアジア語族 [7]；マライ・ポリネ

シア語族 [30]。調査した結果，畳語には，次の二つの機能があると考えられる。

⑽(i)　基幹語の意味に別の意味特徴を付け加える。
　(ii)　品詞のカテゴリーを変化させる。［カテゴリー変換］

「カテゴリー変換」は，重複によって，品詞が別の品詞に変わることである。品詞に変化が生じないが，他動詞が自動詞になるような品詞内での機能変化（［カテゴリー内変換］）も見つけられた。動詞の重複に限定して，どのような意味特徴と「カテゴリー変換」が観察されたかを以下にまとめる。一つの品詞で複数の意味特徴のある言語も観察されるので，見出された意味特徴の数が，扱った言語の総数以上になることもある。

3.2.1　意味特徴

動詞畳語には，26 種類の意味特徴が認められた。その内 20 種類は，以下に示す 4 種類の基本的意味タイプに還元され得る。一言語に，二つ以上の下位の意味が存在することがあるので，カッコ内の数は調査した言語総数 89 より多くなっている。

⑾　反復 / 継続 [102]　弱小化 [38]
　強化 [26]　複数化 [24]

動詞の畳語は，半数以上が，反復 / 継続 を表し，意味の中で最も多い。2 番目に多く観察される意味は，弱小化であり，強化の例の約 1.5 倍に相当する。上の 4 種類の基本的意味タイプには，下位（サブ）タイプが存在する。各基本的意味タイプに分類されるサブタイプを例数が多い順に並べると以下のようになる。

⑿(i)　反復 / 継続 [102] --- 反復 / 継続 [68]
　あちこち [14]　習慣 [9]　進行形 [5]
　同時性（副詞句形成）[3]　多様な行動 [2]
　未完了 [1]　所格相 [1]
　(ii)　弱小化 [38] --- 弱小 [17]　無目的 [10]
　無秩序 [3]　試み [2]　不注意 [2]
　不熱心 [2]　みせかけ [2]
　(iii)　強化 [26] ---　強化 [25]　過剰 [1]
　(iv)　複数化 [24] ---　複数 [19]　分布 [4]
　相互関係 [1]

各基本的意味タイプに属する動詞畳語の具体例を以下で見ることにする。

⒀　反復 / 継続：tepya「話す」 tepya-tepya「話し続ける / とりとめなく話す」
（デンゲゼ語：バンツー）

⒁　同時性：busal「走る」 bu-busal「走っている間」
（アメレ語：パプア）

⒂　baramga：「跳びはねる」 bara-baramga：「あたりを飛び跳ねる」
（ワールバル語：オーストラリア）

⒃　弱小：gadhinma「粉砕する」
gadhi-gadhinma「いくらか粉砕する」
（ンギヤンバー語：オーストラリア）

⒄　試み：dal「叩く」da-a-l「叩くことを試みる」
（ムンダリ語：オーストロアジア）

⒅　無目的：luka「探す」 luka-luka「目的もなく探す」
（リンガラ語：バンツー）

⒆　強化：bùng「悪化させる」 bùng-bùng「非常に悪化させる」
（ベトナム語：オーストロアジア）

⒇　複数化　yur「横になる」
yu-yur「複数の…が横になる」
（マラックマラック語：オーストラリア）

基本的意味特徴に還元されない意味特徴は，テンスを含む次の 6 種類である。

(21)　速さ [4]　未来 [2]　気楽さ [1]　命令 [1]
　過去 [1]　目的 [1]

3.2.2　カテゴリー変換

動詞の語幹は，重複することで，品詞を変えることもできる。これを［カテゴリー変換］と呼ぶこと

とにする。また品詞内で，主に文法的性質に変化が加えられると考えられることがあり，これを［カテゴリー内変換］と呼ぶことにする。変換の組み合わせと，その例が使われた言語数は以下の通りである（「x 2」は、あらゆる形態の重複を示し，言語の数は括弧内に記した）。

⑵ 動詞 x 2 = 名詞 [4]　動詞 x 2 = 形容詞 [3]
動詞 x 2 = 副詞 [3]

［カテゴリー変換］には，次のような例が見られた。

⑶ 動詞 x 2 = 形容詞
tum「乾かす」 tum-tum「乾いている」
（ムリンバタ語：オーストラリア）

次に，［カテゴリー内変換］を調べてみると，以下の 2 種類ある。

⑷(i) 動詞 x 2 = 分詞 [1]
(ii) 動詞（他動詞）x 2 = 動詞（自動詞）[6]

他動詞の重複が自動詞になる用例が多いことは興味深く，以下のような例が見られる。

⑸ ［カテゴリー内変換］動詞
（他動詞）x 2 = 動詞（自動詞）
koso「切る（他動詞）」kos-kos「切る（自動詞）」
（モキレーズ語：マライ・ポロネシア）
cha「食べる（他動詞）」chi-cha「食べる（自動詞）」
（パコ語：オーストロアジア）

3.3 まとめ

Sapir (1921) では，語全体の重複と一部分の重複と分けて例が挙げられていたが，型にかかわらず，様々な意味の変化とカテゴリー変換が見られることがわかる。意味にかんして，強調や継続を表すものや，テンス・アスペクトの変化が観察される。Kiyomi (1993) は，「意味特徴」と「カテゴリー変換」の 2 機能に注目して調査した。その結果，26 種類の意味が認められ，その内 20 種類の意味が 4 つの基本的意味タイプ（反復 / 継続　弱小化　強化　複数化）に還元された。「反復 / 継続」が最も頻度の高い意味であり，そのサブタイプには，次の意味が含まれる：(i)反復 / 継続　(ii)あちこち　(iii)習慣　(iv)進行形　(v)同時性（副詞句形成）　(vi)多様な行動　(vii)未完了　(viii)所格相。また，「カテゴリー変換」は，名詞，形容詞，副詞に変換される例があり，さらに，他動詞から自動詞に変換される「カテゴリー内変換」も観察された。

4．日本語の動詞重複

日本語における動詞の重複についての記述・論文を参考にして，特徴を探っていく。4.1 では，北原［監修］斎藤［編］(2002) による日本語畳語についての簡潔な記述から特徴を把握する。次に，より詳細な説明のために，4.2 では，国立国語研究所 (1991)，4.3 では，Martin (1991) を概観する。4.4 橋本 (1959) と 4.5 玉村 (1974) では，関連するトピックを見ることにする。即ち，終止形と連用形の違いに着目し，歴史的観点から検討していく。4.6 は，要点をまとめる。

4.1 北原［監修］斎藤［編］(2002)

北原［監修］斎藤［編］(2002: 219-220) によると，古代の印欧語では，重複法が語構成の一つの方法であったが，現代では，わずかに姿を留めているだけである。一方で，語彙全体に対して畳語が占める割合を＜畳語率＞として捉えると，日本語は，その高い割合から，畳語優勢言語であり，コリア語やインドネシア語と同等であると考えられる。

また，意味にかんしては，以下のように述べられている。

> 総じて言えば，重複は，強調を表す最も単純で基本的な形式であり，① 多様性，②強度性，③ 動作の継続性，④ 動作・現象の反復性，⑤ 状態の誇張などの指示機能を内包していて，品詞により，語義により現れ方に差が生じるのである。日本語の畳語は，特に①と⑤に分布するものが多いと見

られる。（北原［監修］斎藤［編］　2002: 220）

上から，日本語の畳語は，多様性と状態の誇張を表現することが多いことがわかる。これらは，名詞と形容詞の重複に関わる意味であり，動詞の重複は③と④に関連するため，分布としては多いとは言えないことがわかる。

4.2 国立国語研究所 (1991)

国立国語研究所 (1991: 38-45) による畳語と動詞重複の説明を詳しく見ていくことにする。畳語は，重複によって生まれた語であり，日本語は，インドネシア語のような畳語の多い言語である。言語には，語全体を重複させて別の語を造る手段があるが，広義には，音素，音節，語根，語幹，連語（句）の重複も含まれる。そこで，厳密には，音素と音節の重複は「畳音」，連語（句）の重複は「畳句」と呼ばれる。語種の観点から言えることは，畳語は，外来語にはなく，和語と漢語のみである。また，オノマトペを除くと，通常は連濁が起きる。動詞については，畳語の意味が，動作の反復継続（例：「泣く泣く」），完了または過去（例：ラテン語 currō［私は走る］；cucurrì［私は走ったところだ］）になる傾向がある。

日本語の動詞は，連用形が重複するのが一般的で，次の例が挙げられている。

(26) 笑い笑い　泣き泣き　走り走り　歌い歌い　呼び呼び　売り売り　（目を）こすりこすり　チマキ食べ食べ

これらの畳語は，連用修飾句として，「…シナガラ」「…シツツ」「…スル一方で」のように，後続動詞と同時的，または，並行的に行なわれる継続・反復動作を表す。一段活用・サ変活用の動詞で連用形が 1 モーラになる場合は，2 モーラに長音化される。例（見→見い見い）（する→しいしい）を以下にあげる。

(27) 柳之助は、おのれの手先を見い見い葉山の顔を眺める（尾崎紅葉『多情多恨』前二）

(28) なかに挟まれた私は疎くされるのを承知で，遠慮しいしいあの肥っていたおなかのあたりへ纏わったことだった。（幸田文『父』）

2 か 3 モーラの動詞の例が多いが，次のような 4 モーラ以上の例もある。

(29) 生きかわり生きかわりたたき直さなくてはならないのだそうである。
（幸田文　『こんなこと』経師）

また，例外的に，意味的な制約があり，例えば「死ぬ」は反復不可能であるので，「死に死に」は使われない。

動詞の畳語形式は，連用修飾句の他に，2 つの類があるという。それらは次のような「生き生き」式と「思い思い」式である。

(30) 「生き生き」--- 枯れがれ，しみじみ，冷えびえ，ぬけぬけ，ありあり，のびのび

(31) 「思い思い」--- 次つぎ，とりどり

(30)「生き生き」式は，そのままか，「－と」または「－に」を伴い，副詞として用いられる。意味は「いかにも～とした様子だ」「本当に～する感じだ」である。(31)「思い思い」式は，名詞（居体言）になった動詞が重複したものである。「－に」が付くことが多い。また，「－に」を伴い副詞としても用いられる。本論では，(30)「生き生き」式が「カテゴリー変換」に相当すると考えられる。即ち，動詞の重複により副詞に変換された例として捉える。それに対して，(31)「思い思い」式は，「日々」「常々」のように，名詞が重複されて，副詞になるとみなす。「思い思い」は，「人々それぞれ自分の思ったとおりに。めいめいの考えに」（『スーパー大辞林』）を表すことになる。

次に，注目すべき点が述べられている。即ち，動詞畳語は，連用形だけでなく，終止形も重複されるのである。中世・近世初期には，以下のように，連用・終止ともに重複が見られた。

(32) 泣き泣き生まれた，1，泣く泣く生まれた。
（『ロドリゲス日本大文典』）

(33) 泣き泣きも良い方をとる形見分け
（柳多留十七）

現代でも以下のような終止形畳語が見られる。

(34) ますます，かえすがえす，おずおず（＜怖づ），おそるおそる，見す見す，見る見る，ほうほう（＜匍ふ）

(35) そこで泣く泣く声をあげて（中略）名前だけでも聞かせてやろうと（木下順二「絵姿女房」『夕鶴・彦市ばなし』所収）

歴史的に，上代では，動詞畳語は，以下に示す例のような終止形の重複だけであったという。

(36) 言う言う，思ふ思ふ，聞く聞く，知る知る，すす，たどるたどる，走る走る，ふるふふるふ，ゆくゆく，わななくわななく

連用形畳語が登場するのは，中古時代の平安中期である。現在では，「泣き泣き」と「泣く泣く」が共存しているが，「泣く泣く」は，反復する同時動作（「泣きながら」）を表すというより，逆説的意味（「泣きながらも」），または，強調された悲観・困惑を表す副詞として語彙化されているようだと説明されている。[3)]

4.3 Martin (1991)

Martin (1991) は，動詞の重複について多くの用例をあげながら説明している。まず，連用形の畳語は，述語として使われるときに，文を副詞化すると述べている。その用例として，以下の文が挙げられている。下線部が畳語部分である。[4)]

(37)(i) 泣き泣き話した。
(ii) 道を聞き聞き行った。
(iii) 頭を掻き掻き…
(iv) 冷や汗をかきかき…
(v) 鉛筆を舐め舐め筆を運んでいます。
(vi) お菓子を食べ食べ歩いています。
(vii) 不平を言い言い仕事をしています。
(viii) 考え考え歩いています。
(ix) それを堪え堪え，がんばり抜いた。
(x) ジョーは繰り返し繰り返し，この種の質問に答えなければならなかったし…

以上の畳語は，「動詞連用形 –ながら」で置き換えることができると説明している。また，畳語と「動詞連用形 –ながら」が共起することもある。以下の例文が挙げられている。

(38) 酒を飲み飲み，考えながら歩いて行った。

また，1 モーラの語基は，連用形の母音を長音化するが，このような語基は数が少ない上，この構文では畳語形で成立するものがほとんどない。少ない例として，以下があげられている。

(39) 借金しいしいやっと生活してる。
時間を気にしいしい家へ急いだ。
彼女の顔を見い見い聞いた。
弓を射い射い….
家を出え出え…

次に，連用形の動詞畳語であるが，次の 5 つのグループに分類されている (Martin 1991，408-411)。

(40)(i) 自動詞の動名詞（? 副詞）
飽き飽き，懲り懲り，蒸し蒸し，おじおじ，すべすべ，うねうね[5)]
(ii) 副詞
変わり変わり，重ね重ね，泣き泣き，追い追い
(iii) 主観的副詞（「と」を伴うこともある）
ありあり，晴れ晴れ，冷え冷え，惚れ惚れ，生き生き，枯れ枯れ，伸び伸び，しみじみ，浮き浮き

(iv)　名詞[6]
延び延び，切れ切れ，散り散り，絶え絶え，飛び飛び，すれすれ，思い思い，離れ離れ，ちぎれちぎれ，別れ別れ

(v)　形容詞　（－し）
慣れ慣れ－し

(40iv) は，Martin では，名詞扱いになっているが，『精選版日本国語大辞典』と『スーパー大辞林』によると，ここに挙げられている畳語は，名詞，副詞，形容動詞の内一つか二つに相当し，必ずしも同じではない。例えば，「延び延び」は『精選版日本国語大辞典』では，副詞と形容動詞であるが，『スーパー大辞林』では，名詞と形容動詞である。「切れ切れ」は『精選版日本国語大辞典』『スーパー大辞林』ともに，名詞と形容動詞である。また，「散り散り」は『精選版日本国語大辞典』が名詞と形容動詞で，『スーパー大辞林』では，形容動詞のみとされている。

Martin (1991: 798-800) は，感情的な効果を出すために特殊な形態の副詞を取り上げている。彼が ‘affective adverb’[7]（喚情的副詞）と呼ぶこれらの副詞の多くは重複されるが，「にこにこ」「はきはき」「びくびく」などオノマトペも扱っている。七分類されている中で，動詞の終止形と連用形の重複が含まれている。連用形はすでに取り上げたので，終止形の動詞畳語の例を以下に列挙する。

(41)　「代わる代わる」「ますます」「見る見る」「みすみす」「泣く泣く」「ぬるぬる」「恐る恐る」「おずおず」「つくづく」

上の例にある動詞畳語としての「ぬるぬる」の意味が不明であるので，辞書を参考に，意味を確かめることにする。辞書『スーパー大辞林』によると，副詞の「ぬるぬる」の説明は以下のように２種類ある。

(42)(i)　ぬるぬる（副）① 水気があって，なめらかで，滑りやすいさま。ぬらぬら。「石に苔が生えて―（と）する」② 粘液状のものがうごめくさま。柔らかくて，つかもうとすると抜け出るようなさま。「―（と）したナメクジのようなもの」

(ii)　ぬるぬる（副）〔ほどける意の動詞「ぬる」を重ねた語〕ゆるんでほどけるさま。抜けるさま。ずるずる。「をろ田に生はるたはみづら引かば ― 我（あ）を言な絶え」〈万葉集3501〉

『精選版日本国語大辞典』は，「ぬるぬる」には，見出しが３つある。それぞれをまとめると以下のようになる。

(43)(i)　「ぬるぬる」（副詞）「ずるずると解ける様を表す」

(ii)　「ぬるぬる」（副詞：多く「と」を伴う）「生ぬるいさまを表す」

(iii)　「ぬるぬる」（副詞 / 形容動詞：「と」を伴うこともある）「⑴粘液状のものがつかみどころがなく，形を変えるさま，柔らかくて，つかもうとすると，抜け出るようなさまを表す語。また，そのようなものがついて滑りやすいさまを表す語。⑵のっぺりとして凹凸がないさまを表す語」

これらの辞書を比べると，(42ii) が (43i) に相当し，古い用法で動詞の終止形「ぬる」が重複されている。近藤 (2001: 114) は，(42ii) で挙げられている万葉集からの例の類歌で，地名と蔓の名前が異なる歌を扱っている。次のように「たはみづら」の代わりに「いはゐつら」となっている。

(44)　入間道の大屋が原のいはゐつら引かば<u>ぬるぬる</u>我にな絶えそね（奴流奴流）
「いはゐつらを一度引くと，何度もズルズル抜けてくる」

上の歌は，蔓性の植物である「いはゐつら」は，何ヶ所にも根が生えているので，一度引くと，何度もズルズル抜けてくると言う解釈がされるという。近藤は，別の解釈も提言している。それは，「引く」と「ぬ

る」が繰り返されて「引くと抜け，また引くと更に抜け」というように「引く」と「抜ける」という一連の動作の反復を表す意味である。現在われわれが使う「ぬるぬる」の意味は (42i) と (43iii) の⑴であり，終止形の重複ではないであろう。また (43ii) は，動詞ではなく，「ぬるい」という形容詞の語基の重複により副詞となったと考えられるので，カテゴリー変換の例である。

4.4 橋本 (1959)

橋本 (1959) は，終止形畳語を「ナクナク」型と連用形畳語を「ナキナキ」型とし，これら二形式の共存がいつであったのか，また表現の差異について歴史的に考察している。本稿に関連する内容について見ていく。まず，「ナクナク」型は，極めて少数で「ミルミル」「ミスミス」「オソルオソル」「オヅオヅ」「カハルガハル」等がある。これらは，動詞の機能を失い，状態副詞になっていると述べている。本来の意味が変化し，行動を引き起こす外界の状況または，主体の態度を表す傾向がある。これに対して，ほとんど全ての動詞が「ナキナキ」の形になり得る。動詞の連用形は単独で連用修飾できないので，「ナキナキ」型が連用形にとっての一つの機能と考えられる。

橋本は，以下の２文の違いを中学生３年生に聞いた。

⑷⑸(i) お父さんはこの春生まれた子馬を泣く泣く隣村へ売りに行かれました。
(ii) お父さんはこの春生まれた子馬を泣き泣き隣村へ売りに行かれました。

32 名の中 14 名が「泣く泣く」を「悲しい気持ちで」「泣きたい気持ちで」「いやいやながら」と捉え ,「泣き泣き」が，泣くという行為を伴うと理解していたのであった。以上から ,「現代語では，連用形の重複が連用修飾機能を持つことは一つの文法的事実であり，終止形の重複は語彙的事実に過ぎないのである」（橋本 1959：446 ）と述べている。[8)]

橋本は，歴史的観点から文献を検討し，奈良時代までは「ナキナキ」型がなかったようだと主張している。「ナクナク」型は,「マスマス」や「シクシク」などに代表されるように，奈良時代には動詞の機能を保持しながら，副詞化も進んでいたらしい。平安時代に入って，現在にまで残る副詞としての「ナクナク」型の固定化が「泣く泣く」「返す返す」などに見られる。「ナクナク」型は表面的には優勢であった。しかし，鎌倉時代に入ると，「ナキナキ」型の一般化が進み, これ以降増加していく。換言すると，「ナクナク」型から「ナキナキ」型への系列が認められ，質的に多様性を帯びる。「ナクナク」と「ナキナキ」型はどちらも動詞性を帯びているときは連濁の例が見られない。連濁になることは一語であることの表れであり，語彙的固定化を意味する。次の例を見てみよう。

⑹ 心あわただしき雨風に皆散り散りにきほひ帰りぬ。（源氏　藤裏葉）

（46）の 散り散りは，「ちりじり」と連濁を起こし，「に」を伴うので, 状態副詞であることを表している。さらに，以下のような例もある。

⑺ 御息も絶え絶えなるさまにて聞ゆ （讃岐典侍日記）
⑻ 忍び忍びの御かたたがへ所はあまたありぬべけれど （源氏　箒木）

動詞の重複が，（47）では，なるを伴う形容動詞として，さらに，（48）では、のを伴う連体格となっている。筆者は，これらの例をカテゴリー変換として捉えるべきであると考える。つまり，動詞の重複は，副詞だけでなく，以下のように３種類のカテゴリー変換があると提案する。

⑼ 動詞 x 2= 副詞　動詞 x 2= 形容詞
動詞 x 2= 名詞

形容動詞は形容詞の下位分類であると考えている。また（49）は,（40）で示されている Martin (1991)

の分類にも相当することが分かる。

4.5 玉村 (1974)

玉村 (1974: 127) は，木下順二の作品から興味深い例を挙げている。それは,以下の類似表現である。

(50) じっさはおったまげで，泣き泣きそれをひろって，庭のすみに埋めて…
（ガニガニゴソゴソ「わらしべ長者」所収）

(51) そこで泣く泣く声を上げて，（中略）名前だけでも聞かせてやろうと
（絵姿女房「夕鶴・彦市ばなし」所収）

ほぼ同じ状況描写に，連用形と終止形の異なる形態が用いられている。玉村は，（50）が児童を対象に書かれた民話の地の文であり，（51）が一般人向けの朗読の語り手のことばということに起因すると考えるべきだと推測している。

玉村 (1974: 127-128) は，終止形畳語と連用形畳語の歴史的変遷を次の 4 点を要約している。

(52)(i) 上古になかった連用形畳語が中古以降に終止形畳語の座をおかすようになったこと
(ii) 連用形畳語は，活用形式から言えば非四段活用に，組成上から言えば，複合動詞に早く例が見られること
(iii) 四段動詞の中では，三音節以上の動詞に，連用形の畳語化の例が早く現れること
(iv) 中世以降の例のうち,特定の動詞については,四段動詞・非四段動詞を問わず，終止形畳語のまま残ったこと

(52iv) に指摘されている特定の動詞とは,「マスマス」「ナクナク」「ハフハフ」「カヘスガヘス」「オヅオヅ」「オソルオソル」「ミスミス」「ミルミル」などで,不変のまま残ったのである。

なぜ終止形畳語の「泣く泣く」が連用形畳語「泣き泣き」と並行して，連用修飾句として現代でも使用されているのだろうか。玉村は，この疑問に対しての考察を展開している。ナクナクの用例を調査した結果,「源氏物語」では 45 回,「平家物語」では 78 回使用されていることを指摘している。特に,「平家物語」に於ける使用度数は，副詞の中では 16 位であり，注目に値すると述べている。頻用の結果,具体的に「泣く」動作を示さずに，あきらめなければならない心情を表す情態副詞となったと主張している。また,「泣く」が完全自動詞であることも副詞化を促進したと言う。例えば，以下の文では，修飾語句を受けずに，後続の動詞の連用修飾句としてのみ機能している。

(53) 障子にナクナク一首の歌をぞかきつけける。
（平家巻一　祇王）

本来は,二種の動作の同時性を表していた。しかし,その意味が失われてしまうと，日本語の構文上，挿入句として意識されたため，副詞化につながったと提言している。一般的な終止形畳語から連用形畳語への交替という現象があったが,「ナク」ほど連用形畳語の登場が遅く，終止形畳語と連用形畳語がこれほど長い間共存した例は他には見られないということである。江戸時代の文献では,常に主として「ナクナク」が使われ,「ナキナキ」は専ら口頭語として用いられていたらしい。

4.6 まとめ

4.1 では，日本語が畳語優勢言語であること，また，重複は強調を表す基本的形式であり，動詞畳語は，継続性と反復性を示すことを確認した。4.2 では，日本語の動詞畳語の特性について知ることができた。第一に，日本語の動詞は，連用形が重複するのが一般的で，連用修飾句として,「…シナガラ」のように後続動詞と同時的または，並行的に行なわれる継続・反復動作を表す。第二に，連用修飾句の他に，副詞として用いられる「生き生き」式と「思い思い」式があることが分かった。「生き生き」式は「いかにも～とした様子だ」を表現し,「思い思い」式は動詞が名詞になり，それが重複したのである。第三に，現代では，終止形の重複があるが，その数

は限られている。歴史的にみると，上代は終止形畳語のみであった。4.3 では，連用形の動詞畳語が 5 分類されている（(i)自動詞の動名詞　(ii)副詞　(iii)主観的副詞　(iv)名詞　(v)形容詞）。また，終止形の畳語に言及しているが，その中の一例である「ぬるぬる」の意味を確かめた。4.4 では，「ナクナク」型が少数で，動詞機能を失い状態副詞になっていること，また，ほとんどの動詞が「ナキナキ」の形になり，連用修飾機能を持つことが指摘された。歴史的にみると，奈良時代までは「ナキナキ」型がなかったらしい。4.5 では「泣く泣く」と「泣き泣き」が共存している理由を知ることができた。

5．考察

世界の言語における動詞の重複の機能を知った上で，日本語の畳語はどのような特徴があると言えるだろうか。前節で，日本語の動詞畳語には，生産的な連用形の重複と，生産性が低い終止形の重複形があることが分かった。専門書及び辞典などでは，どのような説明がされているのだろうか。[9] 例えば『日本大百科全書（ニッポニカ）』（近藤 2014）は，動詞の重複についての説明はなく，畳語全体の意味はさまざまあるとし，それを 5 つの型（複数　反復　強調　不定　擬音・擬態語）に分類している。その中で，動詞の「重ね重ね」は 反復，「見る見る」は 強調を表していると考えている。また，次は，動詞の重複を個別に扱っているが，それぞれ捉え方が異なっている。

(54)　沖森（他）(2008)
　(i)　動作の継続（連用形の重なり）：「泣き泣き，思い思い，懲り懲り」
　(ii)　動作の進行（連体形の重なり）：「みるみる，かえすがえす，ゆくゆく」

(55)　『日本語学研究事典』（石井 2007: 171）。
　(i)　動詞（連用形）継続や反復を表す副詞
　　例：「泣き泣き」「休み休み」「思い思い」
　(ii)　動詞（連用形）様子を表す副詞
　　例：「生き生き」「散り散り」「のびのび」「晴れ晴れ」

（54）は，動詞が連用形と連体形の畳語の二通りとそれぞれの意味（「継続」と「進行」）を示しているが，副詞であることは言及していない。（55）は，終止形についての記述はなく，連用形の 2 種類の副詞に，それぞれの意味（「継続 / 反復」と「様子を表す」）をあげている。

さて，3.2.1 で取り上げた 89 言語のデータの中で，日本語の動詞畳語で連用修飾句として「…シナガラ」を表すタイプは，(12i) 反復 / 継続 のサブタイプである「同時性（副詞句形成）」に相当すると考えて良いだろう。Kiyomi (1993) のデータには，以下の 3 例のみが見つかる。

(56)(i)　busal「走る」bu-busal　「走っている間」
　　（アメレ語：パプア）
　(ii)　wabi「隠れる」wabi- wabi「隠れている間」
　　（ウサン語：パプア）
　(iii)　honor「歩く」honor-honor「歩いている間」
　　（ムンダリ語：オーストロアジア）

しかしながら，日本語の連用形重複とは異なり，同時性を表す二つの動作が同一の主語である必要はないようである。次のアメレ語の例文では「彼ら」と「豚」の動作の同時性を表している。

(57)　Ho　bu-busal-en　　qo-in
　　豚　走る（畳語）－主語　叩く－大過去
　彼らは，豚が逃げた時（走っている間に）殺した。

また，「しみじみ」「のびのび」のように動詞の重複が副詞になる「カテゴリー変換」は，3.2.2 で見たように，次の 2 例だけである (Kiyomi 1993)。

(58)(i)　kira「推測する」kira-kira「推測では」
　　（インドネシア語：マライ・ポロネシア）
　(ii)　liwát「繰り返す」lìwat-líwat「何度も」
　　（ヒリガイノン語：マライ・ポロネシア）

89 言語との比較から，見逃すべきでない重要な違いがある。第一に，畳語が副詞的用法で使われる頻度がそれほど高くはないことは，データからも明確である。さらに，（56）（57）の 5 言語には，上の意味以外に，反復 / 継続 を表現することができるのである。ところが，日本語では，次のように，反復 / 継続 を表現することができない。

⑸⑼＊パーティーでは，食べ食べた。
　＊その話を聞いて，泣き泣いた。

当然ではあるが，日本語では，一つの動作の継続や反復を表現するために，動詞畳語を使用することができないのである。[10)]

日本語の動詞畳語は，主に，二つの動作が同時に行われることを表すため，後続の動詞の連用修飾句（副詞句）としてのみ機能するのである。興味深いことに，副詞句または，副詞としてのみ，動詞畳語が用いられる言語は，Kiyomi (1993) の 89 言語のデータにはなかったのである。従って，動詞畳語が副詞的用法に限定されていることが，日本語畳語の特質として捉えるべきではないだろうか。換言すると，日本語において，動詞の重複の第一機能が，同時性を表す副詞（句）への「カテゴリー変換」と考えることが自然であるかもしれない。さらに，反復 / 継続という類像的（‘iconic’）な意味付加は，副次的機能として捉えた方が良いのではないか。また，日本語の動詞畳語の「カテゴリー変換」の種類にかんして，4.3 の (40iv) (40v) 及び，4.4 の（47）と（48）を考慮に入れると，筆者が（49）で提示したように，副詞のみならず，形容詞と名詞にも変換される可能性を認めなければならない。

６．結論

本論では，動詞の重複形である畳語について，様々な言語からのデータを調査し，その傾向を確認し，日本語の動詞畳語の機能を考えた。文レベルの反復は考慮に入れず，語レベルの重複を検討した。語基の重複によって，新たに生じる意味だけでなく，別の品詞に変わる「カテゴリー変換」にも注目して考察した。2 節では，重複語（畳語）の定義を提案し，3 節では，日本語以外のさまざまな言語における動詞畳語の特徴と傾向を観察した。4 節では，歴史的な視点も含め，日本語の動詞重複の特性を概観した。5 節は，世界の言語における動詞畳語のデータと比較することで，日本語の動詞重複の特徴を考察した。

結論として，日本語における動詞畳語は，主に副詞的用法に限定されている点が特質であると考えられる。動詞重複の特徴は，一般に「反復 / 継続」などの意味の付加として捉えられる傾向があるが，日本語の動詞畳語の第一機能としては，動詞から副詞への「カテゴリー変換」と考えることが自然であるのではないかと提案した。また，類像的（‘iconic’）な意味付加については，副次的機能とみなすべきであると述べた。さらに，「カテゴリー変換」は，主に副詞に変換されるが，形容詞と名詞に変換される可能性も認める必要があると主張した。

注

1）主に『ブリタニカ国際大百科事典』を参照した。
2）Kiyomi (1993, 1995)，清海 (2001, 2022) でも報告した。
3）しかし，『スーパー大辞林』で確認すると，「泣く泣く」は，［① 泣きながら。「―遺体を葬る」② 泣きたいほどの気持ちで。「―先祖伝来の土地を手放す」］と二つの意味があり，①の「泣きながら」が含まれている。
4）Martin (1991) はすべてローマ字表記で書かれているので，筆者が日本語表記に書き直した。
5）「うねうね」は，「畝」が重複したと考えたほうが自然であろう。『スーパー大辞林』によると，動詞「うねる」は「畝（うね）」の動詞化である。従って，名詞の畳語である「うねうね」が不特定多数の畝を表し，その後，副詞として使われるようになったと推測することができる。
6）「名詞」と訳したが，Martin (1991: 411) は ‘precopular noun’ と呼んでいる。
7）『英語学要語辞典』は，‘affective’ を「喚情的」とし，以下のように説明している。
「知的意味 (cognitive meaning) に対して，こ

とばに付随する感情的な連想部分を喚情的意味 (affective meaning) と言う。明示的意味 (denotation) と暗示的意味 (connotation)，あるいは，指示的意味 (referential meaning) と主情的意味 (emotive meaning) との区別に等しく，どの場合にも意味の中核としての内容伝達な部分と，それにまつわる付随的な，対象指示には，直接関係しない意味，という区分が根底に見られる ...」

8）筆者には，「泣く泣く」と「泣き泣き」の両方とも「泣きたいような辛い気持ちで」を表す副詞として，次のような表現で使うことができると思われる。

(i)買ったばかりのポットを落としてしまい，泣く泣く破片を拾い集めた。

(ii)買ったばかりのポットを落としてしまい，泣き泣き破片を拾い集めた。

二通りの表現はほとんど同じ意味ではあるが,「泣く泣く」の方がより副詞的で，「泣き泣き」にはある程度の動作性が感じられることは否めない。

9）「畳語」の定義と用法については，清海 (2022) を参照のこと。

10）畳語とは言えないが，以下のように言うことはできる。

(i)パーティーでは，食べに食べた。

(ii)その話を聞いて，泣きに泣いた。

上の表現は，強調の意味が加わるが ,「食べ続ける / 泣き続ける」という文で表される継続の意味は必ずしも含まれない。

参考文献

沖森卓也（他） 2008.『図解日本語』三省堂, 東京.

北原保雄［監修］ 斎藤倫明［編］ 2002.『朝倉日本語講座 4：語彙・意味』 朝倉書店，東京.

清海節子 2001.「反復語の機能的特徴」『駿河台大学論叢』23: 77-100.

清海節子 2020.「日本語の畳語 ―名詞の畳語が表現する意味の可能性―」『駿河台大学論叢』60: 13-27.

清海節子 2022.「重複と類像性 (iconicity) ―畳語が表す類像的意味とその他の意味―」『駿河台大学論叢』63: 15-29.

国立国語研究所 1991.『語彙の研究と教育（下）』（日本語教育指導参考書 13） 大蔵省印刷局，東京.

近藤明 2001.「主体変化動詞が重複形になる場合」『金沢大学教育学部紀要 人文・社会科学編』50：108 – 116.

玉村文郎 1974.「連用修飾句ナクナクについての覚え書き」『同志社文学』9: 126-140.

張麗縁 2005.「連用形の重複構文について―ナガラ構文との比較から―」『国語学研究』44:106-118.

橋本四郎 1959.「動詞の重複形」『国語国文』28.8: 445-460.

Kiyomi, Setsuko. 1993. *A typological study of reduplication as morph-semantic process: evidence from five language families.* Unpublished Ph.D dissertation, Indiana University.

Kiyomi, Setsuko. 1995. 'A new approach to reduplication: a semantic study of noun and verb reduplication in the Malayo-Polynesian languages.' *Linguistics* 33.6, 1145-1167.

Martin, Samuel E. 1991. *A Reference Grammar of Japanese*. Rutland Vt. : Tuttle.

Matthews, Peter H. 1999. *Morphology*. 2nd edition. Cambridge: Cambridge University Press.

Sapir, Edward. 1921. *Language: An Introduction to the Study of Speech*. Hartcourt, Brace and Company: New York.（Paperback edition (2004) Dover Publications: New York. ; 安藤貞雄訳『言語』(2003) 岩波文庫）

辞典

石井正彦 2007.「畳語」 飛田良文・遠藤好英（他）（編）『日本語学研究事典』 明治書院，171.

亀井孝・千野栄一・河野六郎（編著者）1996.『言語学大辞典〈第 6 巻〉術語編』大修館 , 東京.

近藤泰弘　2014.「畳語」『日本大百科全書（ニッポニカ）』（電子版）小学館.
小学館国語辞典編集部（編）2008.『精選版日本国語大辞典』（電子版）小学館.
寺澤芳雄（編）2002.『英語学要語辞典』 研究社.
ブリタニカ・ジャパン　2016.　『ブリタニカ国際大百科事典 』（小項目電子辞書版）
松村明（監修）2005－2021.『スーパー大辞林』（電子版）バージョン 2.3.0 (284)　三省堂.